舟橋聖一　滝壺

小川国夫　血と幻

尾崎一雄　わが松も

永井龍男　刈田の畦

大岡昇平　『恥の歌』その他

河野多恵子　怪談

阿部昭　自転車

安岡章太郎　瀑布

山室静　ひとりね

上林暁　ブロンズの首

円地文子　墓の話

田中澄江　カキツバタ群落

文学 1974

日本文芸家協会編

文学1974

日本文芸家協会編

編纂委員

秋山駿

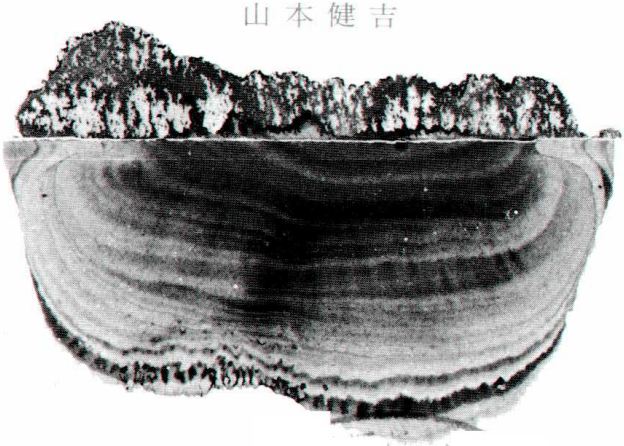
磯田光一

後藤明生

佐多稲子

藤枝静男

山本健吉



講談社

文学1974
昭和四十九年五月二十日　第一刷発行

編纂者　日本文芸家協会
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇
印刷所　株式会社常磐印刷所
製本所　有限会社文信社
定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan

(文1)

一九七三年の文学概況

秋山駿

一九七三年――この年のエピソードのような特徴は、それが終末論の流行した時だ、というところにある。この終末論の影は、もっとも軽薄な流行から、「終末から」というような雑誌の発行を経て、ついにもっとも真面目な制作の場面、大江健三郎の『洪水はわが魂に及び』のようなものにまで達した。

この終末論の流行は、たぶん最初は、昭和元禄的な日常の光景をもたらした経済の繁栄が、ついにインフレの地点に達したそこから、ほとんど自動的に生み出されたものに違いない。

最初は、軽薄なものであった。終末論は、繁栄の一定水準に停滞している社会の状態と、この停滞によって倦怠している生の光景に、適度な刺戟を与えるいわば味つけのようなものであった。白けた世界、とか、おれ達には何もすることがない、というのが、この時期、いわば若い世代の合言葉であった。石原慎太郎の『太陽の季節』――高度成長の発端、そして大衆社会化現象の日常化以来、社会の風俗的な流行は、常に若者達への迎合において成立したのである。

この終末論の流行が、最初は、週休二日制の現実化、あるいは日常生活におけるレジャー意識の拡大、という波と平行してやってきたことを忘れてはならない。この流行は、休日二日制をもたら

した社会の背後の動向を、自分の眼から隠し、日曜日がもう一日！　というような安易な形式で意識されるそこに、出発するものである。もう一つの日曜日を使って、世界の終末のことをゆっくり考えてみるなどとは、なんと楽しいことではあるまいか。

なるほど、一般文化の傍を流れるアングラ的な場面では、数年前から、世紀末的な色彩や終末論の声が、しかるべく語られ、漠然と用意され、ときには大いに期待されてもいた。しかし、それも真剣なものではなかった。終末について不安を抱き、あるいは恐怖し、あるいは願望する、本当に真実な声など、どこにも存在しなかったのだから。そればかりか、傍道を潜行するこれらの終末論の声は、社会の風俗上の変化と結婚することによって、いわば流行の最尖端としての地位を獲得し、絶えず日常の中へと収束されていたのである。彼等は、終末を考えようとしたのではない、ただ終末論の流行を待望したのである。

しかし、いくら終末論を流行させようとしたところで、それに先行しかつ潜在する、社会の漠然たる不安と懐疑という動向が存しなければ、本当の流行になることはない。

戦後の約三十年、ほぼ一世代を経過したこの社会は、自分に疑いを抱いている状態にあった、といえる。むろん、この社会は、戦後一応達成した自己の繁栄に、一応満足していた。しかし、一応自分の繁栄に満足してしまった人間が、次に考えることは、それではこの繁栄と満足がそのまま持続するのか、それともあるいは、どこかで脆くも毀れてしまうのではないか、という不安である。

この不安――それは一種贅沢な悩みではあるが、この悩みは、たぶん正確に、そこにある社会の状態を反映していた。繁栄に達する手段そのものが矛盾を生み、その矛盾がいまや或る限界に達し、今後一歩前進しようとすれば、ついに矛盾の方が繁栄を乗り超えて増大し、その後の自分の状

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

態は、悪化するのではないか、という不安である。

今日はいい、しかし明日のことは分らない、もしほんの微かな一揺れでもくれば、すべてが毀れてしまうのではないか。新幹線のシートに満足して坐っている乗客のこういう不安は、満足と不安との二重性になって、なかなか微妙に人を刺戟するものである。

すでに一般に、すべての人が、この繁栄と自己満足のなかには、現にいま生きている自分の生を確かにしてくれるもの、そこに強い生の意味を与えてくれるもの、そういう確実なものが何もないことに、何かしら不安な空虚を隠したものであることに、気がつき始めていた。

明日が分らない、ということは、今日を生きている自分の形に、何の自信もない、というより根拠がない、ということだ。そして、これは生の意識の問題である。おそらくこの社会が、その急速な繁栄の形によって示しているのは、この社会の中では人間がどうやって生きればよいのかその形が分らない、あるいは、自分がどんなふうに死んでいくのかその形が分らない、というような奇妙に恐ろしい状態である——と、そんなふうに人は思い始めていたのだ。

これは、自分を疑う懐疑の状態であった。いまやわれわれは、繁栄という人間のよい状態をもたらすための手段が、同時にそのまま背後では、公害という悪をもたらす手段であったということを、厭でも認めない訳にはいかない。しかし、現在の社会の状態は、その構造の上において成立している。むろん、自分の状態も、その構造の一部品である。では、どうするのか。もはやその構造が、単なる一人ずつの小さな人間的諸手段によっては解決し得ないと思うとき、われわれの偽りの感情が抱くものは、社会の状態のこのままの停止か、それとも、一人ずつが個人になって生きかつ社会の中で亡びることではなく、すべての人が一様にこの社会という巨船と共に運航し、難破する

ときは皆が一緒なのだという感情、あるいは、自分一人が駄目になるのではない、その時は社会も一緒に倒れるのだ、というあの鼠の感情である。

七三年は、だからこの繁栄が、ついに一つの頂点に達して、ゆっくりひび割れ始めた時期、自己崩壊の予感のとき、背後の矛盾が緊張の高圧に達したとき、そういう意識の日常への滲透によって、われわれが自分の生を疑い、空虚なものを見出し、ことによったらこの社会の上における生存の状態は、無意味なものによって構成されているのではあるまいかと、自己矛盾に達したときである。何も確かなものはないのだ、というあの古い言葉が、ゆっくりとその穴から立ち昇ってくる。

こういう背景の下に、だから、小松左京の『日本沈没』というような本が、空前のベストセラーを記録したのだろうと思う。読者は、同時に二つの満足を、自分の現在が安全であるという満足と、明日への怯えが、自分一人ではなく一般的なものであるとの満足と、この二つを味わった。

ただし、もし、この現象に何か真面目な意味があるとすれば、それは戦後という時間が一世代を確実に経過したということ、つまり、戦争のいかなることをも経験したことのない若い世代が、遠い幻影のように聴くかつての戦争と敗戦の事実を、その終末の光景の中に幻想しようとしてみた、ということだろう。すでに、繁栄社会のなかの日常と、戦争という事実とが、彼等の意識や感覚の中では、ごく自然には結びつけられなくなっているに違いない。幻想のその要求は、戦時中に少年であったいわゆる内向の世代の作家が、戦争中の少年時代の記憶を喚起しようとする試みと、まことによく並行していた。

読者も作家も、彼等は意図せず、共通して、この繁栄の状態が出発したその根元へ、眼を向けることを漠然と強制されていたのである。

しかしながら、満足はここまでであった。少年が狼がくる、狼がくると嘘をいっているうちに、やがて本当に狼がやってきた、というあの寓話のように、七三年の社会は、その終りの部分にあたって、ついに二つの裂け目、あるいは人間に敵対する社会の牙をあらわした。インフレと、石油ショックである。そして、この経済混乱の形において、この社会が内蔵しかつ潜在させていた、一つの危機と混乱の実在にはっきりと達し、これを証明した。繁栄の薄い膜は裂けたのである。しかし、この現実の事態を迎えて、これに対応するわれわれの生の意識は、どう変化の影響を受け、どこへと往こうとするのか——。

その後に生じたことを考えるのは、私の役割を超える。私はただ、七三年の情況についていわれ、記憶に残った二人の文学者の言葉をあげておく。一つは、大岡昇平のもので、彼はその混乱を眺めて、戦後初めての価値の変化の時がきたのではないか、といっている。もう一つは、平野謙のもので、彼は七三年の文学情況を眺めて、もしかしたら、かつてなかったような変質が生じているのではないか、といっている。私は、この批評家の勘を信じたい。よいにしろ、わるいにしろ、われわれは、何かしら一種の価値の混乱、一種の場面転換の時期を迎えて、識らずすでにその渦中に立っていたのである。

繁栄と不安と、混乱と動揺と、変化と予感と、矛盾しつつ揺れ動く極と極との間に磁場を形成されて——七三年の文学は、あるいはかつて見たことがないほどに、生の意識や価値の、分裂によって豊富であり、混乱によって多様であって、総体としては、何かきらきらしたものを含みながら、不定形の、しかも無秩序に拡大された星雲状のものを思わせる。量的には繁栄であり、質的には多様であり、そして個々の作品としてみれば、その真の小説的達成がどれほどのものであるかを、懐

疑される状態にあった。つまり、完全なもの、堅実なものというより、新しい模索とみえるものが多かった。

無数の泡立ちのようなものが、生成したり、消滅したり、離合集散しながら、出口を求めて、破裂の一歩手前にいながら、しかしその予感によって抑圧されている、その光景――これは創造の契機とはいえぬまでも、文学が或る改変を求めて、場面転換の場にいるのだ、といえないだろうか。

一人ではなく多くの人が、七三年の情況に、インフレ文学という感じを抱いた。文芸誌の増大とともに、小説がむやみと多量に生産されたからである。小田実『ガ島』のような七百枚を超えた作品が、雑誌に一挙掲載になるなどということは、かつて見られなかった現象であろう。

しかし、これを、繁栄としてではなく、文学の拡散による水増し状態として捉え、この現象を、文学の求心力やら凝集力やらが喪失したところに生ずる解体だ、と考える江藤淳が、この年の初頭に、「衰弱の文学を排す」といっているのは、注意に価いする。

雑誌小説繁栄の一方では、また書き下ろし長篇の制作も盛んだった。主だったものに、安部公房『箱男』、遠藤周作『死海のほとり』、大江健三郎『洪水はわが魂に及び』、深沢七郎『盆栽老人とその周辺』、加賀乙彦『帰らざる夏』、丸山健二『雨のドラゴン』、幸田文『闘』、清岡卓行『花の躁鬱』、後藤明生『挟み撃ち』、高橋たか子『空の果てまで』、津島佑子『生き物の集まる家』、などを数えることができる。

このうち、安部、大江、遠藤の諸作品は、一時期のベストセラーであったと思う。これは、これまでの雑誌小説偏重に対する、書き下ろし長篇形式の定着化であるとともに、いわゆる純文学が商

品としても成立するような情況が到来したことを、物語っている。

むろん、この純文学長篇の商品化は、読者における意識の推移のようなものがなければ、成立しない。すると、この推移は、時代を知的に論理的に考えようとする綜合雑誌の退行と、見合っていると思われるだろう。それは、この時点が、一種の転回点とともに解体の時期を示しているのであって、それ以前の時代に適合した知的な言葉が、形骸化して現在のリアリティに達しないと感ぜられるとともに、同時に、知性の一種の風俗化が進行していることを示している。

いわば、社会的な諸矛盾を文学の言葉で語ること、それも文学的な深化を忘れて——というような傾向も、顕著だったのである。インフレ文学の根の一つは、そこにあるだろう。

ここで、ついでに、連載の完結や一挙掲載による他の長篇を挙げてみれば、大岡昇平『萌野』『幼年』、吉田健一『金沢』、井上光晴『心優しき叛逆者たち』、小川国夫『或る聖書』、阿部知二『捕囚』、李恢成『約束の土地』、小田実『ガ島』などがある。

こうして並べてみると、その内容や主題も豊富なものなら、その方法も、実験的な手法まで混じえて、またおそろしく多様である。つまり俗にいえば、盛況であるように見える。そして、いずれも読んで面白い。この面白いということが、一つの大きな特徴であって、それはこれらの制作が、小説の物語的な面白さを忘れぬとともに、作者各自の私の場において成立するというよりも、読者の場において成立しようとする配慮に富んでいる、という意味にも見える。

そのことは、直接的には作者の善意の結果であるが、同時に、いささか小説を造り過ぎる、小説が面白い造り物になり過ぎる傾向として、見えてくることも否めない。そういう眼から見れば、これらの作品の或る物、造り物めくその傾向が、作者の内的な要請に必ずしも基かないもの、したが

って、作者の真実性ある私の場所からは遠く離れたもの、として考えられるので、このことはたとえば、その流れの中にいると目される作者、加賀乙彦、小川国夫、辻邦生の三人を、七三年の三羽烏といい、彼等は、フォニー、疑わしい作品を造る者達だという、この年末の江藤淳の感想を呼ぶのである。

むろん、ここで大切なことは、小説制作の或る傾向がフォニーなものであるか否かの問題ではない。それならば、このフォニーとは反対のもの、真実なもの本当なものの、それは何であり、そしてそれはどこにあるのか、という問題である。

おそらく人は、ここに編まれたこのアンソロジーの中に、その解答を見出すような心算になるであろう。ここに収録された中・短篇の多くは、どこか一点で、制作の自然らしさ、ということを基調にしている。自然らしさとは、いわば、作者の私が素直に表現されているということになる。つまり、そこには、作家の内面に密着するとともに、われわれに人生に直接触れるかのごとき思いを抱かせる作品世界がある。それではこれが、フォニーの反対か？

だが、公平さのためには、私は異なった観点も提出しておかねばならない。みられるとおり、これらの中・短篇にある自然らしさとは、多くが人生観照的な性質のもので、いわば私小説形式のものである。しかし、そこに見出されるリアリティは、果してよく長篇小説の場にも延長し得るものなのか。通じ得たとしても、それはよく現代の生の状態を捉え得るものなのか。そしてさらに、現在の長篇小説においては、作者の私さえ虚構しなければならぬような、そのような作業を強いられているのではないか、と。

そして、以上の事柄のなかに、小説の繁栄あるいは肥大化の、もう一つの根が見出せるだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それは、必ずしも出版ジャーナリズムの要請によるものではなく、つまり、卑近に小説が売れるとか、現代的な意識産業による小説の商品化システムということばかりではなく、その根は、背後で進行している、価値の分裂と混乱による多様化、おそらく多様性などということがばかばかしいほどの、一つずつのものが孤立して雑多に分散された状態、にあるということができる。さらには、この分裂と混乱が、文学の基礎をなすリアリティの地点に達するまで、病状が深化しているということができる。――このようなものこそ、文学が場面転換の時期を迎えていることの最大の特徴ではあるまいか。

無闇とものを書きたがるのは乱世の徴しだ、とモンテーニュがいっているが、この言葉は七三年の状態に適当する。それは、背後の社会における諸矛盾を予感するとともに、文学領域における価値の分裂と混乱によって、一種の造られた乱世といったものを現出しているからである。

実際、この年の文芸誌には、「現代小説をどう読むか」とか、「現代の文芸批評はこれでいいのか」というような特集が登場した。前者の特集で中村光夫が、どう読むかということが問題になること、そのこと自体の方が興味深い現象だ、といっているように、これは価値の分裂と混乱が、制作の行為においてばかりではなく、これを受け取る読者の意識の内面においても探られ、改めて検討し直されなければならぬ、という場面に達したことを物語っている。そして、読者の意識と感受性の内面においても、その混乱が進行し分裂が深化していると見えるとき、文学の基体についての疑いが日常化し、従来からの約束事、先人が信じたためにただ信ぜられているに過ぎぬような価値が、解体の、ついに一歩手前の状態に達したことを意味している。

これまでの約束事が煩しければ、それを踏み超えるほかはない。ここで約束というのは、小説の小説らしさとか、批評の批評らしさという意味である。この年の野心的な制作には、どこか従来の形式に衝突しているところがある。小説が小説らしくなくなって、批評的エッセイめいたり、またその反対でもある。『萌野』や『金沢』とともに、安岡章太郎の短篇集『走れトマホーク』や、このアンソロジー中の花田清輝「室町力婦伝」などが、小説がエッセイ化している例だとすれば、批評作品であろうが、江藤淳の『一族再会』は、エッセイがおのずから小説化されているユニークなものであるし、丸谷才一の『後鳥羽院』も、批評の言葉より、小説的想像力がリードしているような作品である。ついでながら、大江健三郎の『同時代としての戦後』にも、この傾向がある。皮肉にみれば、このことは、作者が小説制作において隠し、あるいは失ったその私の分量だけ、批評的エッセイの中でその私を露呈させている、ということになるのかも知れない。

要するに、この現象とか傾向は、従来の約束に縛られた形式では、現代の現実の生の、真のリアリティには達しないと感ぜられるために、一度その枠組を取り払って、書くということのもっとも原形的な場所に立ち還って、そこから改めて出直してみよう、という努力を意味している。模索とか試みの強引な調子、あるいは小説が造られ過ぎるという印象も、そこから出てくるものかも知れない。

おそらく、この分裂と混乱によって肥大化し、場面転換の時を迎えて多様性の星雲状態にある七三年の文学が、ただ一つ一致して求めているものは、現代のリアリティを摑むための、新しい作者の私の確立ということであろう。新しく獲得されねばならぬ、現代の「私」とは何か、とそういう問いを発しているのが、現在の状態である。

私は、ここではあえて、アンソロジー中の作品について何もいわなかった。どの作品も、読めばそれ自体で、自身の内容を読者に直接感受させる作品ばかりであるし、補助的な理解を、附録の文芸時評の記述が果たすだろうからである。

そして、むしろ、この収録の作品群とは対立するような、背景となる文学の流れについて語った。一年の収穫であるこれらの作品が、そこでどんな位置を占めるかを見出すために。

一言にしていえば、これらの作品はすべてほとんどが、価値の混乱や分裂に耐えて、頑固に作者の私を守り、あるいは守ろうとするところのものなのである。藤枝静男の「私々小説」ほか、かなり老年を描いたものが多いのは、そこに頑固に耐えた私が存在するとともに、人生への確実な感触が保証されているからである。

収録作品の選択は、ほぼ百三十枚の長さの作品をもって限度とするために、前出の『金沢』『約束の土地』のようなものは、規定外であり、たとえばもう少し短くても、安岡章太郎「ケベックの雨」その他が敬遠され、古井由吉、高橋たか子らの作品が見送られた。また、この単なる物理的操作のために、「ケベックの雨」を「瀑布」に、古山高麗雄の「水筒・飯盒・雑嚢」を「金色の鼻」に代えて、収録した。

評判作でもあり、選考でも一致して佳作とされた森敦「月山」が収められていないのは、そういう次第による。規定よりほぼ五十枚も長い。それから佐多稲子「歳月」が、佐多氏が編集委員でもあることによって強く辞退されたことが、残念なことであった。

選考の方法とか基準は、前回と同じである。

目

次

滝壺　舟橋聖一　7
血と幻　小川国夫　25
わが松も　尾崎一雄　39
刈田の畦　永井龍男　51
『恥の歌』その他　大岡昇平　59
怪談　河野多恵子　68
自転車　阿部昭　80
瀑布　安岡章太郎　88
ひとりね　山室静　102
ブロンズの首　上林暁　130
墓の話　円地文子　140
カキツバタ群落　田中澄江　152
蜜の味　田久保英夫　184

天井裏の隠匿物　井伏鱒二　196
死とその周囲　里見　弴　203
私々小説　藤枝静男　219
室町力婦伝　花田清輝　227
歌枕　中里恒子　257
此岸の家　日野啓三　274
金色の鼻　古山高麗雄　304
スキット　小島信夫　321
人さらい　津島佑子　333
石の道　金　鶴泳　365
蝕まれた虹　小林美代子　381
まえがき　秋山　駿

巻末・収録作品時評集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com